

9

戊辰戦争における銃創看病人の始まり

鈴木 紀子

順天堂大学医学部医史学研究室

日本近代看護史では、女性看病人採用のはじまりは、1868(慶応4)年閏4月13日に開院した横浜軍陣病院であるとされてきた。しかし、土佐藩医弘田親厚が記した従軍記「慶応四戊辰 会津征討日記 式の巻」に、4月24日付「銃創看病人として此地の婦人九人雇入養成局へ差置ける」との記録が確認されたことで、その定説が塗り替えられた。

本研究では、弘田親厚の日記「慶応四戊辰 東征道の記 壺の巻」と「慶応四戊辰 会津征討日記 式の巻」(両日記は、林英夫編『土佐藩戊辰戦争資料集成』高知市民図書館、2002年に所収)を読み解き、女性看病人を雇入れた壬生城内の養成局(野戦病院)の実態と、弘田が「銃創看病人」と記したその背景を明らかにし、さらに、地元の女性を雇い入れたことの意義についても考察を加えた。

2月14日、東山道先鋒総督に土佐藩岩倉具定が命ぜられ、東征軍の行軍が開始されるにあたり、病院頭取に弘田又親厚が命ぜられ、官軍隊長の列に加わった。病院は銃創刀創を始め、凡陣中に病人を救済すべき任があり、西洋陣営の規則に則り設置されたものであり、土佐藩では弘田を含めた11名の医師でその任にあたった。

4月11日に江戸城が無血開城されたことで、北関東諸藩もこれに相前後して恭順か抗争かの去就が問われ出す。自藩第一主義を採って恭順路線になびく中、下野国内では、黒羽藩、足利藩、大田藩、宇都宮藩、佐野藩、吹上藩が、3月末までに恭順の意向を示した。しかし、主戦派の中でも主力部隊であった旧幕府軍大鳥圭介の軍勢が日光を目指して北上を開始したことで、栃木県の小山から宇都宮で激しい攻防が繰り広げられた。

戊辰戦争は、それまでの農民への圧迫政策に対する一揆の勃発もあり、幕藩体制における農民の苦悩が証明されるという側面もあった。新政府軍は、行く先々の諸藩を服属させ、多くの百姓たちの苦しみを救済する考えであることを訴え、着実に地歩を固めた行動をとった。

宇都宮をめぐる攻防戦では、旧幕府軍も死者167名、傷者170余名に及んだ。薩摩藩も討死16人、負傷者30余人を数えた。宇都宮城での攻防、安塚の戦いで、官軍は壬生城内に養生局(野戦病院)を設置し、弘田ら土佐藩医らが中心となって銃創を蒙った者の治療にあたり、同時に婦人9名を銃創看病人として雇い入れたのであった。

弘田の日記には、左肘の貫通、右肋骨より肩への貫通、膝頭の貫通などの銃創患者がいたこと、銃創から膿汁が出て激痛も激しい者などにはクロロホルムを使用して麻酔をかけて切断術を行っていた事が書かれている。養成局に雇入れた地元の女性が、銃創看病人として具体的に行った看護内容は日記から読み取ることはできない。しかし、地元の女性を雇入れたという事実は、戊辰戦争における新政府軍の宇都宮の土民との友好関係の現れという側面もあったと判断できる。